
あ わ い

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あわい

【Nコード】

N4785A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

【云つてはいけないう、話してはいけないう】それは、幼い頃、少年が彼らと交わした【契約】。しかし、やがてそれは覆されることになる。旅の被い師として生きる半妖の青年・カイリ。カイリはひっそりと、現代を生き抜く妖の元を廻る旅を続けている。今日も、カイリの旅は続く。

プロローグ（前書き）

こんばんわ、維月です。

新連載『あわい』のお届けにあがりました。

以前から、書き続けていた和物の小説ですが、ストーリーがちょっと変。（T―T）

気に入っていただけると、幸いです。（笑）
それでは。

プロローグ

云ってはいけないよ。
話してはいけないよ。

それは、お前と我らを繋ぐ【契約】だからね。

【いいかい、我らのこと……人には話すでないよ。文字にしてもいけない】

【わかった、分かったよ……】

汗ばんだ掌を握りしめて、後ずさる少年。

【もし、その時は……お前を殺しに行くからね
闇に浮かぶ、無数の異形の目が犇めく。

幼かった俺は、一歩間違えれば発狂してしまいそんな殺気を押しつけられて、恐々と頷いた。

その時は、どうする手立てもなかったから、ただ頷くことしかできなかったんだ。
だが今は違う。

扱い方を学び、こちら側から新たに【契約】を結び直したのである。
だから、昔のように奴らに怯えて暮らすことも
もう
ない。

昔
奴らと【契約】をした。
俺は抜い師だった父の後を継ぐため、九つの春に、

【エンジュ……その子かえ？ お前の跡取りというのは】

闇が、喋った。

その時俺は父に連れられて、ただただ真暗い…夜の闇の中にいた。汗ばんだ手で、父の衣の裾を、咄嗟に握りしめる。

深闇の中で

確かに何もいない筈なのに。

なのに、そこに鋭利な『なにか』を感じたのだ。

いや、それはもう、存在感というものだろう。

『そうだ……お前たちの新しい主だよ。しっかり護り、仕えてやつてくれ』

蟠る闇に向かって、柔和に笑った父親に、俺はしがみついていた。

『父上、誰と話してるんだよっ』

『カイリ、闇を、よく見てみるんだ……。彼らはそこにいる』

よく見るのだよ、カイリ

お前にも、

見えるはずだ。

『こ、言霊！ うああっ……』

耳鳴りが、五体を引き裂いていくようだ。

髪を掻きむしってのたうつた後、カイリの肩がひとしきり痙攣する。

頭の中身が、透明になった気がした。

そして、俺は奴らの姿を、はっきりと見たのだった。

【まあ、よかるう。これより代替えの儀を行う。エンジュ…これが
どういう事か、お主も分かるだろう】

主が生あるうちに代替えを行う場合は

使役した異形

に、その身を喰らわせるのが通例となっているのだ。

『ああ……この子を、頼む』

『父上？』

所用に出かける時と同じ顔で微笑った父に、俺はその時…言い得ぬ不安を覚えた。

『どこ行くんだっ、父上！ 離してくれっ、離せ、離せえっ』

異形のとんでもない力に押さえつけられるうち、いつの間にかに父は、そこから姿を消していた。

『お前らっ、父上をどこにやったんだっ！？ 答えろよ！！』

突如ゆるんだ異形の力に、カイリは機敏に身を翻す。

『やめろっ、なっ、なにするんだっ』

闇の中、凍ったような紺碧の瞳が、どこか優しげに細められたのを理解して、彼は抵抗をやめた。

ぐい、と闇の一部が、彼の頭を掴む。

【お前さん…泣いているのかね？ 父が心配が、優しい子…。心配なのは分かるが、これが我らとあ奴の契約でな。致し方ないこともあるんじゃないよ】

『契約って…なんなんだよ？ 父上は…帰ってくるか？ どこに行ったんだ？』

闇が、晴れたのか、それとも、自分の目が闇に馴れたのかどうかは分からない。

そこには、豊かな黒髪を背に流した女性が、真っ直ぐにこちらを見返しているのが見えた。

【……もうそなたの父は戻らぬ。さあ、我らも仕上げといこうか…】

『なっ、なんだよ…くるな、来るなあっ！』

ひやり、と冷たい手が触れて、再びカイリの思考は凍結する。

【契約の証に、おぬしの左目を貰うよ】

父は、強い術者だった。

だった。

開祖として一門を拓き、一族を一欠けも離反者を出すことなく支える、凡てにおいて秀でた人間だった。
少なくとも、俺はそう思っていた。
だが……。

父は死んだ。

方々を探しまわった挙げ句……俺が父の亡骸に辿り着いたのは、それから一月あまりが過ぎた頃だった。

着衣はそのまま。父は、奴らに喰い殺されていた。

山間の小さな泉で、きれいな白骨になっているのを見つけたのだ。

カイリの青い隻眼から、涙が溢れては地に落ちる。

父上、あなたは凄い。

そして、愚かだ。

人間は、欲深き生き物。その身一つでは生きてゆけぬ者。

命を対価に、まつろわぬ者を操る。

なにかに頼らねば生きていけないのなら、捨ててしまおう。

人間としての時も、考えも。

自分は、もう人間としていきたくない。

『父上……濟まない、俺は、もう人間をやめてしまったよ』

父の墓を作った後、カイリは二度と一族には戻らなかった。

龍ヶ淵 りゅうがぶち (前書き)

幼い頃、人としての生に絶望した青年・カイリ。

カイリは、妖を従え、それらを祓う『祓い師』を生業に旅を続けている。

現代を生き抜く妖たちの元を廻りゆき、カイリの旅は今日もまた続く。

龍ヶ淵 りゅうがぶち

灰色に澱んだ空から、無数の針が降る。

水の、針。

身動きするもの凡てを射殺すような豪雨の中を、一人の男が黙々と歩を進めていた。

頭から雨よけのコートを被って歩く男の表情は、そこからは読みとることができない。

「だめだ、このままじゃあ埒があかねえ」

容赦なく打ち付ける雨に、男は曇天を睨みつけて呟く。

その先に見えた大樹の下で、彼は足を止めた。

「うは、ひでえな」

被っていた上着を脱ぐと、濡れたような射干玉の髪が露わになる。

パキッ……

（ん……？）

「木霊こだまの巢か……悪いが、少し借りるぞ」

気配に、彼の青い瞳が樹梢に座っている娘・木霊を見あげた。

そこには、緑い髪あおをした娘が座っている。

【随分と風変わりな童じゃの、お主が噂の被い師か】

鈴を転がす声が、柔らかく彼の耳朵を打つ。

「俺を知ってんのかい」

【『こちら側』で知らぬ者はいないさ。間あわいに棲まう被い師どの】
「間ね、そんな風に伝わってんのか。まあ、否定はせんがな」

あわい。

彼の青い瞳が、スツと一瞬細められる。

人の容姿を保ちながらも、人に在らざりき者^{かたち}。

または妖であり、人間でもある者。

死んでいて、生きている者をいう。

彼 カイリの瞳が揃いでないのは、そのためである。

瞳はあるが、片割れは色も違い、見うる物も異なっていた。

「尋ねるが 龍ヶ淵つてのはどっちかね？」

【この雨に呼ばれるモノは多い、ここより真北に行けばいいよ。ごらん…水馬が行く】

カイリは言われて、白く澱んだ宙^{そら}を見あげる。

水銀色の 一見青く見える鬘を振り乱して、水馬が曇天を

駆けていく。

「一頭くらい…持ってた方が便利そうだな」

【面白い奴よ、あれを狩るというのかえ？】

ころころと笑う木霊に、カイリは苦笑い。

しなやかな四肢に、優美な青い鬘を持つ馬の姿を持つ妖・水馬。

誇り高く、気性が荒い。

その身に巨岩をも砕く剛力を潜めているので、何人も忌避するものの一つだ。

「真北だな、ありがとう」

荷を背負い直して、カイリは木霊の樹を離れた。

カイリは、懐から一枚の書簡を取り出す。

通常ならば、水が触れるとふやけてしまう紙だが、彼が手にしている書簡には、なんの変化も見受けられなかった。

書簡の差出人は、恐ろしく達筆な字で『龍ヶ淵』と記されている。

そう、カイリは書簡の差出人である『龍ヶ淵』の主と呼ばれてやってきたのだ。

（昔と、大分地形が変わった……この辺りも、開発の手が入ってきてんだな）

悠久を生くるカイリたちにとっては、時間など些細なことではないが、問題なのは領域なのである。

カイリがまだ幼かった500年前に比べて、この辺りの森は急速に姿を消した。

森だけのことではない。棲息する獣・同類の数も減少の途にある。

カイリよ、至急に龍ヶ淵に來い

「まさか、だよな」

しとしとと弱まり始めた小糠雨の中、カイリは急ぎ足で、ぬかるんだ山道を登っていった。

カイリは、契約後に人間の時を棄て、この淵の主に育てられたのだ。

「なんともイヤな里帰りだな……ひどく気がが濁ってやがる」

近づくにつれて、濃い死臭を感じる。

腐った肉と、血の匂い。

まるでこの周囲一帯が、死に包囲されているようだった。

ぱたっ……ペタ、ペタッ

頬に触れた、ぬるりとした冷たい感触。

それに目は、自然に頭上にかさばっている枝に向く。

「なっ……!？」

カイリの頬に触れたのは、間違いなく血だった。

そこには、先に見た水馬の首が引っかかっていた。

優美だった青い鬘は、いまや血にどす黒く変色し、哀しげに吹く風に揺れている。

計画性もなく、食いちぎられた首の断面。

おそらく、五体は四方のどこかに散ってしまったのだろう。

「おまえ……」

水馬さえ敵わぬ妖が、この先にいるというのだろうか？

（ま…さか、まさか！？）

カイリに、ひとしきり嫌な確信が生じた。

母からの書簡。

濃い死臭と、血の匂い。

真北へ向かった水馬。そして、水馬は死んだ。

真北には、何がある？

「龍ヶ淵……！」

なにかがあったのだ！

カイリは走った。

「くっ……」

パシャン…と、彼が踏んだのは水溜まりではなかった。

あかく赤く咲く、夥しい血の海だった。

鋭く身を斬りつける冷気の中、カイリはそこに変わり果てた母を見つけた。

【カイリ、よく来たの……妾^{わたし}の、愛しい息子】

「や、やはりっ……斗生^{みこと}っ！」

血に濡れて微笑む彼女の肌は、所々に黒く斑に染まり、毒々しい腐

臭を放っていた。

「斗生っ！？ どうして、こんなになるまで放っておいた！ どうして、もっと早く俺を呼ばなかったんだっ」

立ちこめる腐臭も厭わずに、カイリは淵の岸に横たわる龍の頭を抱き締めた。

【カイリ……】

青い隻眼を細めて、カイリの養母・斗生はゆるゆると人型に姿を歪ませる。

【カイリ……もう分かっているのだ。妾は、もう助からぬ……。これが寿命という物なのだと、やっと分かったよ。その前に、少しお前の顔が見たくなった】

弱々しく、悄然と微笑む斗生。

「情けないこと言うんじゃないよ！ いつもみたいに、勝ち気な斗生はどこ行った！？ なにか方法くらい見つかるだろうっ」

カイリは、斗生の血で汚れた頬を拭って怒鳴る。

【お前……優しい子……昔から、そういうのは変わらぬな】

カイリの脳裏に、一瞬映像がよぎる。

夥しい、血。

涙。

これは既視感だろうか。

（血　　？　　なんだ、ひっかかる。なんなんだ?!）

『　　必ず助けてやる、だから、だから……頑張るんだぞっ』

目に、大粒の涙を溜めた斗生。

そういえば……舐まれた俺を助けたのは、斗生だ。

『龍の病は、同族にしか癒すことはできぬ……助かって、よかった』

『

（そうか、そうだったのか！）

カイリは、唐突に理解した。

キーワードは血！

なぜなら、その血には浄化作用があるからだ。

「そうか、血だ！ 俺の血を使えばいいのかっ」

それならば、この夥しい血の海にも納得がいく。

斗生は、それに気づいていたのかも知れない。

【……カイリ……？】

カイリは、がりりと掌に牙をたてた。

彼の掌には、たちどころに赤い液体が溜まってゆく。

儚い微笑を浮かべる少女に、カイリは掌を差し出した。

「斗生…飲んでくれ。これでいいはずだ」

それに、こくりと頷く斗生。

彼の掌に口づけた彼女の身体が、次第にぼんやりとした光を放ち始める。

それにつれて、彼女の五体を蝕んでいた斑も、跡形もなく消えていった。

【カイリ……思い出したぞ。妾も、昔お前に同じ事をした】

「俺もだよ。助かってよかったな」

カイリは、壊れそうなほどに斗生を強く抱き締める。

斗生は、やんわりとカイリの背中をを抱きかえしながら、哀しげに呟いた。

【迷惑をかけたな…この者たちの供養、手伝ってくれるか？】

「……ああ」

斗生を蝕んでいたのは、開発排水による、あいたく穢濁及びえすい穢瘴である。

淵の穢濁も消え、カイリは再び、母の許を去らんとしていた。

風に舞う桜の花弁が、斗生の黒髪を撫でていく。

沼の端に咲く桜の大樹の傍、二人は寄り添っている。

【まだ、旅を続けるのか？】

「まあな、まだ知ることが多いんでね。もうねえとは思っけど、な

んかあつたらすぐ呼んでくれよ?」

【分かつてる】

ひとひら、ひとひらと舞い散る桜が、斗生の美しさを際立たせている。

「ホントかよ」

美貌の二人が寄り添うと、それは恰も、一枚の絵画のようだ。補足だが、この二人…血の繋がった(?)母子である。

【ホント】

にこりと嫣然と微笑み、斗生はカイリの額に甘く口づけた。

「そつか……じゃ、また何かあつたら絶対呼ぶんだぞ、いいな」

【ああ】

「……よし」

カイリ 人でも、妖でもある間に棲まう『抜い師』

不思議なるものを従えて、彼の旅は…今日も続く。

月の船（前書き）

人と妖、その【あわい】に棲まう祓い師・カイリ。

ある夕暮れに、彼が出逢ったのは人魚の少女・ミナギだった。恋がしたいと海にいる仲間の元を離れて、一人人間界で暮らしているミナギ、彼女が恋人に選んだのは……！？

月の船

【お月さま、お願いします。 もう少しだけ、あたしに時間をください。 あと少しでいいの、あたしを陸にいさせて……】

「……ん？ いま、なにか聞こえたようだが」

夕陽を背に、カイリが橋を渡らんとした瞬間、微かな声が彼の鼓膜を揺らした。

橋から下を覗き込むカイリ。

夕陽の逆光で曖昧だが、確かにそこには人影が見受けられた。 どうやら少女のようだ。

「幽かだが……水のモノの匂い？ あの娘からか」

カイリはヒラリ、と橋の欄干を飛び越えて、下の河口に下りていった。

少女からは、濃い潮の香りがした。

「こんな場所に珍しいな。 お前さん、人魚だろ」

【だれ！？】

少女は、小柄な身を更に小さく縮めて、カイリを睨みつける。

（思いつき怪しまれてんな……）

「いや、怪しいモンじゃねえよ。 あんたと同じ水の妖^{もの}だ」

【ウソよ！ だってあなた……人間の気配がするわっ】

「聞いたことねえか？ あわいに棲む被^お師の話」

【ええ……？】

「別に、知らねえならいいけどさ」

少女はやや暫く訝るようになってから、唐突に笑顔になった。

【あなた……あなたがカイリ！？ 想像してたのと、全然違うわっ、もちろん知ってるわよ、有名なもの】

（騒がしいガキンチョだな……）

カイリは、内心溜息をつく。

「そうか。で、さっきはなにしてたんだい？」

【……それは……】

少女の着ている制服が、どこか寂しげに小さくはためく。

【あたしの名前はミナギ…… あなたの言うとおりの人魚よ。小さい頃から、人間たちと一緒に暮らすのが夢だったの。けど、夢はやっぱり夢のまま終わってしまうのよね】

夕暮れの風が、彼女の色素のない髪を揺めとっていった。

「そんなこたねえよ、夢は叶えるモンだろうが」

真剣に応えたカイリに、水風はくつくつと楽しげに笑う。

【あなた面白い人ね、夢は叶えるモノだなんて。今までで初めて言われたわ……あたしの周りは、反対するヒトばかり】

孤独。

彼女から感じる『影』は、だからなのだろうか。

「いまは、幸せか？」

【うん… 幸せだったり、不幸なときもあるわ。人間は、毎日がせこましいから、時が過ぎるのも忘れちゃう】

ふんわりと笑うミナギに、カイリも薄く微笑み返してやった。

「そうだな、俺たちに比べて、人間はせわしない生き物だ。その生、咲いては散りゆく花のごとし」

【でも、花はまた咲くわ？】

なぜかムキになるミナギに、カイリは再度の溜息。
なんというか……馬が合わない。

譬えるなら、水と油のようなものだ。

「お前たち、人魚によく似てるな。さっき、聞こえてきた……『もつと生きたい』って」

【どうしてなのかな？ あたし、もっと他の女の子みたいに遊びた

いいし、恋だつてしてみたい。こんなの、あんまりじゃない】
（当たり前だ……）

人魚は、短命な生き物だ。

その寿命は

長くて、半年から一年ほどと聞く。

自らの短命さを嘆かぬ生き物が、どこに 있을까。

「ミナギ、月がどうして欠けるか…知ってるか？」

【知ってる。月の満ち欠けと、輪廻は同じだって……知ってるから、だから哀しいの】

もつと、もつと生きたいのに……。

月に願つて、人魚の涙は雫と大気に散りらむ。

「なあ、人魚のお前が海から離れて、かなり無理しているようだが…体をこわしてまで、そんなに大切なことなのか？」

【…ねえ、恋つてしたことがある？】

しばしの沈黙の後、ミナギは恥ずかしそうに俯いてから切り出した。
「……は？」

（あ……恋、ねえ）

「恋ねえ。大分昔のことなんで……長く生きるうちに、そう言うモンはなくなっちゃったよ」

【あらあ不粋ね！ あたしは、燃えるような恋がしたいのよ！】

ぐつ、と拳を握りしめる彼女を横目に、カイリは遂に肩を落とした。
「燃えるって……いつの時代だよ！ まあ、いいけどさ……。体壊さねえよう上手くやるんだな」

カイリは橋の欄干を身軽に飛び越えると、再びねぐらを探しの散策

に歩き出した。

(つつく、つき合ってらんねえ)

カイリは、ヒトと共に過ごすことが元より好きではない。

独立独歩、が彼の信条だ。

簡単に言えば、旅から旅への暮らしなので、関わりが面倒くさくなつたのもあつた。

その時だ。

のろのろとアスファルトの上を行くカイリの背中に、甲高い怒鳴りが体当たりする。

ついでに、ミナギもだ。

【待つて！ 待つてつたら！ 話はまだ終わってないんだけどっ】

「……おい、危ねえな」

コート裾を引かれて転びそうになったカイリは、憎々しげにふんぞり返っているミナギを振り返って、歩みを止めた。

「終わってないって、何がだよ？ こっちは急ぐんだがな。話なら手短かにしてくれ」

【あなたなら見た目もいいし…同じ妖だから、いいわよね！】

ぽけ、と間抜け面になったカイリに、ミナギはさも楽しそうにまわりつく。

「あ。だから、なんの話だ？」

半分固まったまま、カイリは頬を染めてまくし立てるミナギに、おそるおそる問うた。

【恋人に、なつて欲しいのよ……人間じゃ、どうも合わなくて】

(コイツ、人間にも当たったのかよ……)

「俺にか」

【あなた以外、誰がいるの？】

「……………」

月が

欠けないうちに、早く恋をしなければ。

【ね、いいでしょ？ どうせ…長い間ではないんだから】

夜風に靡られる風色の髪を押さえながら、ミナギはカイリの腕に、弱々しくしがみついた。

「分かった……その代わり、その訳、詳しく聞かせて貰うぞ」

【ええ】

ミナギは、いまいる地域にある学校で、生徒として暮らしていると話してくれた。

容姿も人間と大差ないので、紛れてしまうんだと楽しげに笑う。

「それで、他になにがしたい？」

一瞬の逡巡の後、彼女はとんでもなくありきたりなことを言い始めた。

【「そうねえ、一緒に出かけて遊びたいわ。遊園地に行ったり、景色のいいところにも行ってみたい】

カイリの眉が、ぴくりと跳ね上がる。

遊園地は、カイリが尤も苦手な場所なのだ。

「ゆ、遊園地か…ふーん」

【「カイリ、連れてってくれるのっ？」】

もう、行く気満々。

瞳を潤ませる彼女に、カイリは無意識にじりじりと後じさっている。

「仕方ねえな、じゃ……今度だ。今日はもう無理……」

「ありがとっ！」

「んぶっ!？」

皆まで言い終わらないうちに思いきりキスをされ、カイリは面食らって口許を拭う。

（ななっ……なんだこのガキは！？ やっぱ苦手っ（怒））

「あ、ねぐら探しそこねちゃった……」

当初の目的を思い出して、ぽつりと呟いたカイリに、ミナギはまた微笑む。

【なら、あたしの棲み家に来ればいいじゃない。丁度この辺なのよ】
「いいのかよ……」

【カイリなら全然オツケー！ さっ、こっちこっち】
「お、おいっ!？」

【気にしないで、気にしないでっ!】
ズルズルと強引に引きずられていくカイリは、ふと『なぜ女というのは、いつもこんな元気なのか』と内心で毒づくと同時に、深く後悔していた。

ミナギの棲み家は、旧家の井戸に通じているという隠れ池だった。
落ちついた、ウォーターブルーの水が美しい。

【なにもなくてごめんなさい、お腹、すいてるんじゃない?】

池の底は、人間たちが部屋とよぶ物によく似ている。
カバンや雑誌、教科書などが普通に据えられていた。
そして、奥には藻と水泡でできた牀台。

「いや、まだ平気だ」

【……そ。ねえカイリ……甘えてもいい?】
フワリ、と水泡がカイリの頬を掠めた。

「好きにしろよ」

言葉こそ冷たいが、カイリはもう拒まなかった。
というより、そうすることができなかったのだ。

透けたウォーターブルーの水の中、彼女の白い手がカイリを引き寄せる。

ふわり、ふわり。

暖かな水が、カイリの心を撫でては包み込む。

何度も泣きそうな瞳にぶつかり、カイリは強く腕に力を込めた。

【龍は優しいのね。あなた 本当に、あなたを愛してしまいたいそう】

「儚いものこそ美しい……人魚のことを言うそうだ」

【カイリ、あたしね……ここから、いつも月を見てたわ。月ってキ

レイ、でも残酷よね】

しろがね 白銀の鱗を閃かせて、水面近くを回遊する彼女は、本性の人魚にな
っていた。

【そして、月の船になって……あたしを迎えに来るの。死ぬのは、い
や】

水面から顔を出した彼女の頬を、清すがしいものが伝いおちる。

【かりそめだつていい……カイリ、あたしを愛して？】

元より、人魚の命は短い。

彼女は陸に上がったせいで、ただでさえ短い命を縮めることになっ
たのだろう。

泣き疲れて眠ったミナギの髪を撫でながら、カイリはぼつりと呟く。

「月と、お前たちは似ているな……欠けては再生を繰り返す」

月の船は、三日月。

この半月が欠けるまで、この哀しい愛を終わらせなければ。

【カイリ】

「よく泣くな、お前は」

ミナギの傍で、カイリもゆっくりと瞼をおろした。

池の底で、カイリは眠っていた。

寝返りを打った刹那、ぐらりと体が落下する。

「なっ!?!」

ぐしゃ、と底に潰れた彼は、牀台を恨めしげに睨みつけた。

（まだ眠いの……クソ）

「ミナギ……？」

気配の残滓が薄い。

彼女は、大分前にここを出たようだ。

（学校、学校……つと。確かこの地域にや、一つしかなかったよな）
殆ど雑木林に埋もれた池を出て、カイリは歩き出した。

人群れる雑踏を、カイリは行く。

その後ろ姿は、風を背負っていた。

時代の風を。

人の姿を保ちつつも、彼の姿が他に見えることはない。（意識して、
姿を現すことも可能）

だが見えなくとも、確かに底に存在しているものだ。

ミナギの気配を追って、カイリは道なりに進んでいく。

日は既に傾き、時間帯で言えば、いまは放課後あたりだろう。

まばらだが、家路につく学徒の姿が見受けられる。

やがて進むうち、甲高い声援響く校舎が見えてきた。

（気配はここから……）

さくさくと進んでいくカイリ。

校内で何人もの生徒とすれ違ったが、やっぱり誰にもカイリの姿は
見えていない。

「つーか、水泳部ってのはどっちだ？」

いま彼がいるのは、屋上。

まったくの真逆だ。

ミナギの、人間としての名は土井水凧^{どい・みなぎ}という。

「土井先輩、やっぱりすごいなあ……フォームが凄くキレイ。さすが
が大会に選抜されるだけあるよね」

「ねー、スタイルもいいし、なんだか魚みたいだね」

プールの室内に、水を叩く威勢のいい音が響く。

泳いでいる水風を、後輩たちの黄色い声が後押しした。

ミナギは、縦横に水の中を躍る。

「それに、凄くターンが早い……うっとりしちゃうわ」

「そうよねえー」

そんなような会話を、カイリは監視台の上から聞いていた。

（コイツ……大会に出るなんて、一言も云ってなかったが）

そのうち、活動時間が終わり、後輩たちはバラバラと帰ってゆく。それでも、ミナギは泳ぎ続けていた。

月光が、天窓から射して水を銀に染める中、ミナギは大きくジャンプした。

その姿は、まるでイルカのように。

そうしてゆつくりと水を漕いで、プールサイドに手をつく。

「みな、帰っちまったぜ？」

【いいの、カイリに見せたかったから、好都合】

パシャン、と水を打ったのは、もう足ではなく魚類の尾。

上半身を乗り出す彼女は、人魚の姿だ。

灰白い乳房が目にも痛い。

カイリはやつとの事で、そこから目をそらした。

【月……欠けてきたねー】

再び水に潜った彼女が、カイリに手を伸ばした。

「ああ」

たぶん……と飛沫をあげて、二人は水底に沈んでいく。

ひとしきりの口づけを終えたミナギは、カイリの腕の中で小さく、本当に小さな声で呟いた。

【こうして……月を見ながら、いつも思うの。迎えなんて、来なければって】

「俺たちだって、いつかは死ぬときが来る。長いか、短いかだけだ」

【不公平よ、そんなの……。いや、そんなのいやよ。もっと…あなたといたい】

カイリは一瞬だけ、金縛りのように固まってしまふ。

「お前……」

作り物の恋が、本心になんて変わってゆく。

【もっと、あたしが長生きで…もっと早く、あなたに出逢っていればよかったのに】

その瞳は語っている。

もう、自分に残された時間は、幾らもないことを。

月は欠けて欠けて

もう三日月まで日数はない。

【明日、ここで大会があるわ。カイリ……見て欲しいの、あなたに】

「お前っ…もう始めから分かったたのか!? 明日が三日月だとっ」

【知ってたわ……きつと、一人で終わると思ってた。でも違ったわね、会ってまだ十日しか経ってないのに……短い恋だって分かっているのに。あなたを、愛してるの】

だから、死ぬときはあなたの傍にいたい。

「ばかやろっつ……!」

【帰ろう? 池に】

カイリの頬を、温かなものが伝う。

水の中で、唯一それだけが、確かな熱を持っていた。

そして、最期の朝がきた。

プールサイドに、水の騒めきと、選手たちの鼓動が^{こだま}が響いている。
コースの三列目には、真剣な目をした水風がいた。

（これが　あたしの泳ぎおさめ。必ず勝とう！）

水風は一瞬、観客席にカイリの姿を捜すが、試合開始の審判の声に現実へ引き戻されてしまう。

「各自、位置について　」

パン……！

大気を裂く、破裂音。

いま、幕が切って落とされた。

試合の緊迫感に、観客は一様に息をのむ。

（カイリ、カイリ……見ている？）

「ああ、ちゃんと見てるさ」

直接頭に響く彼女の思念に、カイリは薄く微笑んだ。

滑るように、水風は水を舞う。

端瀬を流るる水の如くに他を圧倒した水風は、最期の勝利を得た。

「優勝、三コース・土井水風　　っ！！」

歓声上がるが、そこに、水風の姿はない。

もはや、彼女には浮いていられる気力すらなかったのだ。

ただ、静かに身を任せ、水底に沈むだけだった。

救護班が彼女をタンカへ担いだとき、ミナギは、真っ直ぐにカイリを見ていた。

「ミナギ！？」

（カイリ、連れて行って？　……あたしを、池に戻して）

「きみ、大丈夫かね！？　これから病院に搬送するよ」

年かさの救命士が、起きあがった彼女の肩を掴む。

「いいえ、少し眩暈がして……疲れただけですから。このまま家で休みます」

「そうかい？ 誰か身内の方が来ていたら、付き添ってもらった方がいいよ」

「はい」

ミナギの傍に、カイリの姿を認めて安心したのか、彼は【気をつけて帰りなさい】と皺深い顔を綻ばせて見送った。

【カイリ……あたし、いまとても幸せなの】

池の端で、カイリは瀕死のミナギを支えていた。もう死ぬのにね、と泣き笑いするミナギ。

カイリはなにも言わずに、彼女を抱き続ける。

日が、暮れてゆく。

黄昏が闇に吞まれ、凡てを塗りつぶす闇がくる。

【どうしてって、聞かない…の？】

口を開くたびに、水泡が散ってゆく。

ぱちんぱちんと弾ける泡は、まるで真珠のようだ。

【覚えてる？ あの約束】

「ああ……覚えてるとも」

彼女は言ったのだ。

自分にとって一番の幸せは、愛しい男の腕で命尽きることだ、と。

【また……会える？】

「会えるさ、きつとな」

カイリは泣かない。

涙は、彼女を輪廻から外してしまうから。

【嬉しい……い】

届いた一條の月光に、彼女の頬が綻んだ。

それは一瞬だけだが、今までで一番、美しい笑みだった。

「だから……恋こいは好すかねえ」

消滅してしまったミナギの温もりが残る手を握りしめて、カイリは吐き捨てる。

その声は、震えていた。

夜風が、彼の射干玉の髪を乱していく。

「やはり……伝承は守られるのか」

乾いた風が、草原に晩歌を奏でる。

ひとしきり風が撫でた後、もう、そこにカイリの姿はなかった。

月の船（後書き）

どうも、維月です。

『あわい』3部のお届けにあがりました。

アンデルセン童話の『人魚姫』よろしく消えてしまったミナギですが、ちょっと惜しかったかな……（汗）

雨のむこうに見る夢は（前書き）

今から60年前、俺はこの竹林でアヤメという少女と出会った……。

冷たい雨に終わる恋物語　　。

切ない恋物語は、結ばれなかったからこそ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

雨のむこうに見る夢は

冷たい雨に終わる恋物語

切ない恋の物語は、結ばれなかったからこそ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

初夏の、まだ冷たい雨が竹林を叩いていく。

その、竹林の奥に佇む家が一軒。

静閑な空間には、物音というものがない。

いや、あるとすれば それは細かな雨が、下生えを踏む音だろうか。

無人に思われた家の奥の和室には、老婆が一人横たわっていた。

雨音に混ざって、草を踏む音が軽やかな気配を奏でる。

「きたのかい？」

縁側に首を向けた彼女には、聞こえていた。

「お前さん、今年も来てくれたのかい？ 嬉しいねえ」

見つめる雨の中、人の形をした影が縁側に腰掛ける。

古びた木が、ぎしりと軋んだ。

「ちよつと、気になっただけだ」

荷を降ろして、カイリは布団から起きた老婆の背を振り向いた。

「ちよつと……待っておいでね、茶を淹れるから」

よたよたと覚束ない足取りで廊下に行く彼女を見送りながら、カイリは遠い目をして、雨ばかり落とす曇天を見あげる。

「人は……変わっちまうんだよな」

若いまま時が止まった自分と違い、人間はこの世に生を受けて、あつという間に老いさらばえる。

もし、自分が人間だったならと考えかけて、カイリは苦笑に口を綻ばせた。

「珍しくセンチだな……この雨のせいだ」
思い出も、なにかもを時は流してしまう。

そう、その思いさえも。

今から60年前
俺は、まだ娘だったこの老婆・アヤメ
とこの竹林で出会った。

竹林の奥にある池の辺に、押し殺した小さな嗚咽が響いている。
「父上も母上も、体面ばかり気にして……私っ、家なんか継ぎたくないものっ」

少女・アヤメは、本意ではない縁談話に絶望し、見合いの席から逃げてきたのだ。
「でも、どうしましょ……これじゃあ家に帰れないわ。入水するつもりで来たのに、私ったら、なに考えてるのよっ」

『入水してやる』と息巻いていたアヤメだが、ひたひたと揺らぐ水に、すっかり怖じ気づいてしまっていた。それでも震える足先を伸ばして、自らを叱咤する。

（バカねっ、死ぬのなんか怖くないのよ！　すぐなんだからっ）

だが、怖い。

やっぱり怖い。

ざわり、と意味ありげに竹林を揺らす風。
それ一つでさえも、彼女の決心を殺いでいく。
アヤメは遂に、ぺたんと座り込んでしまった。

ああ、やっぱり自分には無理だ……縁談より何より、死を恐
れてる。何て愚かなんだろう私は！

将来の不安よりも、死を恐れてるなんて。
とんだ笑い話ではないか。

進むわけにも、逃げるわけにもいかず。
ならば、どうすればいいのだろう。
ざわわ、ざわわと風までもが自分を責める。

「私、帰れない」

ばたばたと二つ、涙が乾いた土にシミを作った。
泣いたところで、状況が変わる訳でないのは分かっているのに。
それを認められない、自分が憎らしい。

ここにいれば、じきに見合い相手が探しに来るか、両親が来る。

（もうイヤ、イヤよ……）

「どうした、気分でも悪いのか？」

「きやあつー！？」

俯いていたアヤメは背後からの声に、イヤと言うほどに跳び上がっ
てしまった。

「心外だな、そんなに驚いたかい」

アヤメは、目の前に現れた風変わりな青年をまじまじと見つめてか
ら、安堵の息をつく。

向かってくる人の気配に、ずっと警戒していたのだから、それも当
然といえば当然の反応だ。

「ごめんなさい……私、ちよつと人生に迷ってたのよ」

「道……？ ああ、人生の方な。してなんだ、入水しようここに
？」

カイリは、彼女の裸足を見てから小さく息をついた。
所々、柔肌が擦りむけて赤く血が滲んでいるのが痛々しい。

「だって……皆勝手なのよ。私まだ自由でいたいのに、早く結婚しろだなんて」

「お前さん、いくつだ？」

目の前の少女がそれ程の年に見えず、カイリは思わず聞いてしまった。

「今年、１８になったばかりよ。同じような子はたくさんいるのに、どうしてあたしだけなのかしら」

アヤメは頬を膨らして、理不尽とばかりに腕組みする。

「ほう……」

（１８か、そうは見えねえなあ……）

カイリは延々と続く身の上話に、溜息を交えながら対応していた。

「お針に華道……それにお琴まで！ 花嫁修業とか言って、楽しんでいるのは自分たちだけなのよっ」

「非道いな、そりゃ」

「でしょう！？ ばやばや欠伸もできやしないっ」

「元気、出たか？」

ニツ、と笑うカイリに、アヤメは『あっ』と口許を隠す。

「えっ？ そ、そうね……そういえば」

「死のうなんて、もう考えんなよ？ 親御さんだって、説得すれば分かってくれるさ」

「でもっ！」

「もう帰んな、そろそろ一雨来そうだからなあ……俺はもう行くぜ」

瞬間、アヤメは彼に常人にはない不可思議な雰囲気を感じて、カイリの袖を引いた。

「ねっ、あなた……名前、聞いてもいいかしら？」

「名前……？ ああ、俺はカイリっていう」

「私はアヤメよ、あの……またここに来るの？」

「さあな、気が向いたらまた来るかもしれん」

もじもじと手を揉みしぼっている彼女に、カイリはどこか面倒くさそうに応える。

「カイリは、旅をしているの？ なにか宛があつて？」

「あ、もう、帰れつつつてんのに。ああホラ、降ってきた」

「本当に雨！？ さっきの本当だったのねっ」

「いいから早く行け、濡れるぞ！」

二人揃って慌てて大樹の木陰に逃げ込むが、大した意味もなく濡れ鼠になってしまう。

「黄昏に雨が、ますます陰気だぜ。ホラ、お前にも見えるか、あれが」

「え？」

アヤメはその異様さに、思わず息をのむ。
ねつとりとした生温い風が、頬を撫でた。

薄闇の降りた往来には、人通りはなく。その代わりに往来を行くのは、形のない影や、異形の者ばかりだった。

行列をなして進むのは、妖狐・鬼・天狗・河童・般若・髑髏など。

「声出すなよ？ 通りすぎるまで息潜めてろ」

小刻みに何度も頷くアヤメに『よし』と言って、カイリは懷から宝珠を取り出す。

とりりとした青色の宝珠は、見るからに、触れると心地よさそうな気分を抱かせた。

「カイリ？」

「いいから黙つてろ、奴らに知れたらタダじゃ済まねえからな。水縛呪、水呪！」
すいばくすいばく

彼の投げた宝珠は、アヤメを内へ封じ込めて体積を増す。

つまり、アヤメの背丈分だけ宝珠が巨大化したのだ。

堅固な水結界は、完全に彼女の存在を覆い隠していた。

「なにこれっ……水の中なのに、私ちゃんと息ができてる」

それに、人間と変わらぬ様子で、町を歩いている異形の者はなんなのだろう。

それらと親しげに話す彼は、一体何者なんだろう。

今時分、旅人なんているのだろうか？

よく考えてみれば、それもおかしな話。

彼女の脳裏に、ある言葉が浮かんた。

あやかし

陰と陽のあわいから生じし者たち。

人心を惑わし、魂を喰らう。

「カイリ、あなたまさか……」

こぼ…と水泡が彼女の口から浮かび上がる。

と、ふわりと風が頬を撫でたのを感じ、アヤメは封が解けたのを悟った。

「もういいぞ、どうした？ 青い顔して」

「カイリ、あなた……もしかして、人間じゃないのかしら？」

カタカタと震える彼女に、カイリは小さく溜息する。

「なんか怖がらせたみたいだな。だが人の姿をしているから『人間』とは限らんものだ。俺は人と妖、その間に棲む者」

「だから、雨にも濡れないの？」

雨脚は弱まったものの、雨はまだ完全に止んではない。

木陰から離れて佇む彼は、雨の中で浮き上がって見えた。

「そうだ。悪いことは言わねえ、早く帰るといい」

背を向けようとしたカイリに、アヤメは鋭い問いを投げつける。

「女一人で、夜道を行かせるつもりなの？」

肩越しに振り向いた彼女の目は、確かな怒りをその色に顕していた。

「仕方ねえ……送るが、俺は人の家にや入れねえから、入口までだ」

「ありがとう、優しいのね」

「……お前、裏表ありすぎ」

「女って、こういうモンなのよっ」

「おや、ここにいたかい。お茶が入ったよ」

アヤメは、庭の大桜の枝に座っていたカイリを見つけて、手招きした。

「雨に中る、中入^{あた}つてろよ」

「これくらい、どーったことないよ。あんたが来るまで動かん」

「仕方ねえ頑固だ。分かったから中入れ」

傘を掲げて呼ぶ彼女に、ふわりと、少女の面影が重なる。

「あんたは、昔のまんまだ。変わんないねえ」

茶を啜りつつ、しみじみというアヤメだが、その声には寂しさが滲んでいる。

「こういうモンだしな」

「そろそろ、あんたが欠けた魔法が切れる頃だ。憶えてるかい？
あの約束」

「ああ」

「ねえカイリ、ほんとにあたしにしか見えてないの？」

「らしいな、このとおり……他の奴らは見向きしねえし」

アヤメの部屋の縁側に腰掛けて、カイリは団子を頬張っている。

「なんだか嬉しい、秘密の友達みたいで」

「友達？」

嬉しそうに笑うアヤメに、カイリはどこか、意地悪そうな笑みを浮かべた。

「あら、違うの？ 毎日訪ねてくれるのは」

「友達か……そうなのかもな」

目元を和ませるカイリに、アヤメは花咲くように笑う。

「そうよ」

「お前、それ強引」

「いいのーっ」

「いいのかよ……。あ、誰か来るぞ？」

不機嫌そうに、自分と呼ぶ声を聞いて、アヤメは慌ててカイリから離れる。

「父上だわっ、か、隠れてカイリ！」

そそくさと、アヤメは奥の部屋にカイリを隠すと『静かにね』と言いつけて出て行ってしまった。

だが常人には見えないカイリ、こっそりと彼女の後をつけていった。驚いた。

ばちんっ…と鋭い音が大気を引き裂く。

「なっ、なにするのよ!？」

「いい加減にしろ!？　どこまで儂の面目を潰せば気が済むのだっ」

アヤメは打たれた頬を押さえ、ふんぞり返っている父親を思いきり睨みつけた。

打たれた頬が、痛々しい。

「なにが面目よ!　そんなのあたしには関係ないじゃない!!　好きでもない男なんて、結婚できる訳ないでしょうっ」

「もういい!　この恩知らずっ!？　……今日という今日はもう許さん、どこでも好きな場所に行くがいいっ、今日限りでお前とは絶縁だ!」

「望むところよっ!」

「お前など、もうしらん!」

「ああそうっ!　こちらこそお世話様!」

歩調荒く部屋を出て行った彼を見送って、カイリは蹲ったままのアヤメの腕を引く。

「非道い親がいるもんだ、……立てるか？」

「ごめんなさいね…?　みっともない所見せちゃった。私って、やっぱりダメな子」

「気にすんな。それより、本当にここを出るのか？」

「あんな啖呵きってしまったんだもの、そうするしかないわね。いつかこうしようとは思っていたから、案外平気よ」

カバンに衣服や小物を詰めながら、アヤメは思い詰めたような笑みを浮かべた。

「それが平気って顔かよ、バカめ」

「バカで結構よ……でも、もうこの部屋ともお別れなのは寂しい」

カイリは、この少女を気に入っていた。

変な意味にはなくて、本当に一人の人間として気に入っていた。

「ついてこい……一人では、どうにもならんんだろ？」

「心配してくれるんだ」

「……ちよつと、気になっただけだ」

含みありげな問いに、カイリは背中を向けたまま、無然と言いかえす。

「うん……」

カイリはアヤメを連れて、各地を転々と廻って歩いた。

桜降る小道や、炎天下の海岸など。

共に風雨に耐えながら、あつという間に時が
つた。

季節が廻

「また、ここに帰って来ちゃった。ねえ、どうして？」

アヤメは、カイリの袖を引いて訴える。

ここには、戻りたくない、と。

涼やかな風が竹林と、もう腰まで伸びた彼女の黒髪を、サラサラと揺らしていく。

「ここで、暮らせばいいんじゃないかって……思ってた」

竹林の奥にある閑地を指さして、カイリは彼女の肩に触れた。

「どういうこと……ここに、家を建てるつもり？ ダメよ、材木が要

るわ……それはどうするのよ」

「ここはお前の故郷だしな、ここで暮らすのが一番だと思った。旅暮らしは、なんだかひどく辛そうだったから」

「そんなの、勝手な思い込み！ カイリ、あたしが重荷なの？」

アヤメの表情に影が差す。

涙を一杯に溜めた瞳は、今にもこぼれ落ちてしまいそう。

いやいやをして、胸板に縋りつく彼女の温もりがただ、カイリは哀しかった。

「バカな奴、誰が今すぐ置いていくなと言った？」

「言っただじゃないの！ ここで暮らせばいい、お前はって」

ついに泣き出した彼女がじれったくて、カイリはアヤメの唇を塞いだ。

指で。

「ん、むっ……むっっ！」

「しばらくは一緒にいてやるよ、けど……俺にも用事があつて、じきに傍にいてやれなくなる」

「よ、用事ってなに？」

さつと、アヤメの顔が青ざめる。

「まあ色々だ、色々」

「女の人……ね？」

カイリの口調に浮いた物を感じたのか、アヤメは面白そうに口角をあげる。

「母だな」

「なあんだ、がっかり」

「お前、なに期待してたんだよ」

のへ……と呆れ顔をするカイリに、アヤメはただ、楽しげに笑うだけだった。

竹林の奥には、桜の太木がある。

その傍で、カイリは地面に家の間取りを区画していた。

「なにやってんのよ、なにこれ……間取りなんか描いたりして」

「まあ見てろ、すぐ済む」

「きやつ……！」

大地が、ひとしきり大きく脈打った感じに驚いて、アヤメはその場に立ち竦む。

「建・除・満・平・定」

耳慣れぬ言葉を紡ぐ彼は、青白く明滅を繰り返している。

アヤメはあまりの驚きに、息をするのも忘れていた。

みるみるうちに、その場に和風家屋が現れ、明かりが点る。

「今日からの住処だ。お前の家だよ」

「スゴ……イ、本当にスゴイ！　ありがと、カイリっ」

じゃれつく彼女を避けながら、カイリはふと遠い目をした。

「やだ雨！？　カイリ、濡れちゃうわよーって、ああ平気なんだっけ」

カイリは、雨の中どこか虚ろに真白い空を見あげ、小さく溜息する。

彼女の想いが自らにあることを、カイリは理解していた。

だが、どうすることもできない。

その想いに、応えてやることができないのだ

「カイリ、早く中入ろうよー」

呼ぶ声さえも、浅く自身を斬りつけていく。

「ああ、今行く」

これは夢だ。

雨の向こうに見る夢は、泡沫のしらべ。

雨が止めば消えてしまっ、夢でしかないのだ。

「これ、持っとけよ」

「なあに？　きれいな石…」

彼が懷から取り出したのは、空色の勾玉だった。

アヤメはそれを光に透かしたりしながら、色味を楽しんでいる。

「俺の鱗だ。寂しいときは、それを握ればいい。片割れだし、俺とも繋がってる」

「カイリ？！　イヤだよ……イヤ」

アヤメは、精一杯の力を込めてカイリの背に搔きつく。

「あたしだけ置き去りなんて……ヒドイよ」

「いいや、置いてく訳じゃない……お前はここで生きるんだ」

「いつも一緒だった……一緒にいてくれたのに、どうして!？」

切なく訴える彼女を、カイリはついに抱きすくめた。

「……カイリ……」

「人の子よ……これ以上に踏み込んでならぬよ。闇に魂を喰われてしまふ、だからお前には……ここで生きて欲しい」

「……そんな」

雨が、止んだのだ。

「分かってくれ、アヤメ」

アヤメの頬を、いくつもいくつも涙が伝い散る。

「ねえ、カイリ……最後に、魔法をちょうだい？」

涙伝う頬を拭って見あげる彼女に、カイリは静かに頷いた。

「お願いよ……」

ゆっくりと、唇同士が触れ合う。

「愛してる……愛してるから、もう、泣くなよ」

「うん、うん……」

雨音が、耳をつく。

静閑な空間を、ただそれだけが彩っていた。

「そろそろ、切れる頃だろうねえ……あたしも、やっと休める」

「アヤメ……悪かったな、一人にして」

「いいや、いいんだよ……あんたが謝る事じゃないさ」

布団に横たわるアヤメは、皺くちなな頬を綻ばせて、深く息を吐いた。

「約束、ちゃんと憶えてるぜ」

「ああ……そうだねえ、やっと叶うんだ。この老いた体を棄てて、自由になれ……る」

「アヤメ、アヤメ？ ……眠ったのか？」

応えは、ない。

その代わりに、老いた彼女から『あの日』のアヤメが抜け出した。

「カイリ、言つて？」

「アヤメ……お前は」

果たして……。

お前は、俺といて幸せだったのか？

「あなたと過ごした時間、忘れないわ。幸せだったのよ？」

「本当に？」

「嘘なんかつくもんですか……もう、あまりここにはいられないから。お願い、言つて？」

ふわり、と宙を舞ったアヤメに、カイリは目頭が熱くなるのを感じた。

「俺も愛してる……絶対に前を忘れないから」

「あらあ、嬉しい」

くすぐったそうに、アヤメは『またね』と笑う。

「……ああ……」

そして、消えていった。

カイリの頬を、止めどなく涙が伝いおちていく。

冷たい雨に終わる恋物語

。

切ない恋の物語は、結ばれなかったからこそ……

いつまでも、輝き続けるのかも知れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4785a/>

あ わ い

2010年10月11日11時36分発行